Original Paper
［査読有り］原著論文

フランス自由主義とは何か？
—過去30年の先行研究の総括—

What is French liberalism?
—Summary of previous research over the past 30 years—

武田　千夏
大妻女子大学比較文化学部

Chinatsu Takeda
Faculty of Comparative Culture, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：フランス自由主義，先行研究，ポスト冷戦，保守主義的自由主義
Key words：French liberalism, Historiography, Era after cold war, Conservative liberalism

抄録

本論文は主に過去30年のポスト冷戦期に展開されたフランス，アメリカ，イギリスを中心とする19世紀フランス自由主義研究を総括する．フランスとアメリカで19世紀フランス自由主義というプリズムを通じてポスト冷戦の現状に見合った新たな共和国像が模索されたことを指摘する．これは冷戦後ではなく冷戦中に19世紀フランス自由主義研究が政治化したイギリスとは対照的な傾向である．一方近年政治の保守化に呼応して，保守勢力との親和性の強いフランス自由主義潮流が存在感を増した．これらの事例から，現状における自由のあり方をフランス革命の歴史哲学の解釈に託して間接的に表現するという「歴史哲学の伝統」が現在のグローバル化されたフランス自由主義研究にも受け継がれた結果それぞれの研究者が属する国の政治状況などによっても19世紀フランス自由主義の見方が微妙に異なるという特徴があることを明らかにした．結論としてフランス自由主義研究とは19世紀フランスを対象とする思想史研究であるが，現在に対する視点が過去の見方に直接的に影響を及ぼす傾向が顕著であるという意味においては現代思想的側面をも併せ持つ学問領域であることを指摘した．

1．はじめに

今からおよそ 30 年前の 1989 年 11 月に，東西ドイツを隔てていたベルリンの壁が突如崩壊した．その結果，それまで 40 年以上に渡ってヨーロッパ大陸を分断した自由主義と共産主義のイデオロギー対立，つまり冷戦が突如終焉した．ヨーロッパの人々はこれでやっとヨーロッパ大陸全体に自由や民主主義などの価値観が根付き，平和で安定した時代が訪れると一時安堵した．

アメリカでは，ソ連，中東ヨーロッパの社会主義政権の破綻を受けて，F・フクヤマが即座にアメリカ型市場経済，民主主義の勝利を宣言した [1]．「歴史の終焉」として知られるこの政治理論は，冷戦後の国際政治のパワーゲームにおける自国のミッションを規定しただけのものではなく包括的な世界史的展望に根ざしていた．フクヤマは冷戦を「自由の領域の拡大が神の摂理であり，それをアメリカが選ばれた国家として実現していくはずだ」という「明白な運命」の追求の一部とみなした[2]．彼は冷戦の終焉を「正義の勝利」と呼び，国際社会においてアメリカ型の民主主義や自由主義経済が唯一普遍的な理念となった，との意味を込めて「歴史が終わった」と表現したのである．

しかしながらポスト冷戦の国際社会で，アメリカ型モデルを唯一普遍の理念として掲げ続けるという試みは困難を極めた．第一にそのような一方的な主張は価値観が多様化された国際世界におい

て到底説得力を持ちえなかった[3]．その後の正当性なき戦争として知られるイラク戦の断行によって，アメリカ型デモクラシーは国際的信用を失墜させた[4]．そしてトランプ大統領の登場により，アメリカ型デモクラシーは国内的な危機にもさらされたのは記憶に新しい．

以上の歴史的経緯を鑑みた時，冷戦直後のヨーロッパの研究者たちの先見の明に驚かされる．彼らは早々とイギリスやアメリカの経済的リベラリズムの伝統およびアメリカ型のデモクラシーの内的矛盾を察知し自国の政治文化により適合したリベラリズム，デモクラシーのあり方を模索し始めた．そしてそれまでに忘れ去られてしまっていたヨーロッパ大陸固有のリベラリズムの伝統を掘り起こす作業を始めた．この過程で経済的リベラリズムではなく政治的リベラリズムとして始まった19 世紀フランス自由主義と，その担い手であるジャック・ネッケル，バンジャマン・コンスタン，アレクシス・ド・トクヴィル，スタール，フランソワ・ギゾーらに学術的脚光が当たり始めた．

加えてポスト冷戦期のフランス自由主義研究を特徴付けたのはその国際性だった．少なくとも1990 年代以前のフランス自由主義研究の中心はイギリスとフランスだった．しかしポスト冷戦期においては，これらの国に加えて，イタリア，ドイツ，ベルギー，ルーマニア，オランダなどのヨーロッパ諸国，そして日本などの先進諸国の研究者がフランス自由主義研究にたずさわり始めた [5]．研究者の出身国が多様であるという事実に，自由主義が唯一のイデオロギー選択とするポスト冷戦の共通条件が反映されていた．

同時にこのような政治背景ゆえに，個々の研究者が属する国の政治文化の特殊事情がポスト冷戦期のフランス自由主義研究に反映される傾向が強まった．ここではフランスの例を挙げたい．元々フランスで発達した独自な自由主義であるためフランス自由主義 (libéralisme français，French liberalism)と呼ばれる．しかし当のフランス人は100 年以上もの間，つまり第三共和政が成立した1870 年代前後から 1970 年代までこの思想から遠ざかっていた．その理由は，元来フランス自由主義とはフランス革命期から 1848 年まで続いた立憲君主政の時代に関連づけられた政治思想であるとみなされてきたためである．それゆえ第三共和政以後の共和政のフランスとは相入れないものと考えられた．さらに第二次世界大戦後にマルクス主義がフランスの知的シーンを支配した結果自由主義が軽視されるという状況に何ら変化はなかった．しかし 1970 年代以後フランスでマルクス主義が弱体化する一方で，多民族国家，キリスト教とは異なる宗教の影響が強まるにつれて，従来の国民全体をもって一つの政治単位とみなす「一にして不可分の共和主義政治モデル」とは異なる新たな政治ヴィジョンが求められるようになった．この時点で国民国家以上に個人の多様性が重んじられなければならないという考えが強まった．その結果 100 年以上も蚊帳の外に置かれ続けてきた 19 世紀フランス自由主義研究が再度フランスで脚光を浴びるようになった[6]．

それにもかかわらず，フランスの研究者たちは肥大した行政国家と個人間の緊張関係から逃れられない現実をひしひしと感じる日常生活を送っており，自国の自由主義の歴史的伝統に対して自信を持つことができないでいる．

例えば M・ゴーシェは，1970 年代のフランス人研究者たちは「人民主権に込められた潜在的な独裁制の危険性」を秘めた現状における「デモクラシーの原則の危うさ」に突き動かされて「悲観的な空気」の中でフランス自由主義の研究を始めた，と説明する[7]．L・ジョームは，フランスでは国家が「一般利益の後見人」として大きな役割を果たす以上，この前提が「個人の自由」にとっては深刻な障害となるという歴史的前提から出発しなければならないと強調する[8]．F・メロニオも，フランスには「立憲主義，地域分権，自主政府に特徴づけられるイギリスやアメリカのリベラリズムに匹敵するような政治的リベラリズムは存在しない」と言い切る[9]．イギリスやアメリカの自由主義とフランスの自由主義は個人の諸権利の強調，国家と社会の分離，権力分立，多元的価値観などの共通の価値観を有しているのに関わらず，フランスの研究者たちはイギリスやアメリカとフランスの共通点ではなく，両者の違いに関心が向きやすい．[10] その結果，フランス以外の研究者にとってフランス人研究者が提示するフランス自由主義のイメージは悲観的に映りやすい．

本論文では研究者の出身国によるフランス自由主義の見方の違いから見えてくるフランス自由主義研究の先行研究の特徴を中心に論じる．著者はフランスの代表的研究者から「アメリカの研究者

は何もわかっていない」と聞いて驚いたことがある．一方著者の研究はフランスの共和主義の伝統を重んじる日本の研究者からは英米寄りとコメントされたことがある．これらのコメントを通じて著者は個々の研究者が置かれた現状の国内状況が彼らの研究にも影響を及ぼすのではないかと考えるようになった．言い換えるなら 19 世紀フランス自由主義研究とは経済，社会的視点に立った時には国際間の対話が成り立つが政治的立場に立つと深刻な分断が生じるのではないか．それゆえ著者は 19 世紀フランス自由主義研究とは現状の政治に対するプリズムとして機能する側面があると考える．

以上の問題意識に立って，本論文は現在岐路に立つと思われるフランス自由主義研究の過去 30 年のポスト冷戦期の先行研究について国別に総括する[11]．これまで日本では，フランスを中心にフランス自由主義研究の先行研究が紹介されてきた[12]．それに対して，本論文ではフランス自由主義研究を国際的な視野から振り返ると同時に，国ごとの研究動向の相違点についても強調することによってその国ながらの研究動向について分析すると同時に，この研究テーマを取り巻く多様なアプローチについての理解を促す．

先行研究（１）―フランス

そもそもフランス自由主義が何かについて定義づけることは困難である[13]．フランス人研究者にとってフランス自由主義とは歴史と原理原則という二つの天秤の間を揺れ動く存在である．それらのうちのどちらをより優先するかによってフランスにおけるフランス自由主義研究は二つの傾向に区分される．

元来哲学研究を専門とするジョームはそれとは逆にフランス革命の刻印を受けた史実を重視する傾向にある．彼は「リベロー（フランスの自由主義者）たちは，個人の自由に関わる言論の統制，または国政などに関わる政治問題について，独自の見解を表明し，政策に反映させようとした．そしてこの政治議論のプロセスの中から複数のリベラリズムの潮流が生まれた」と政治政策に反映された揺れ動く自由のあり方について分析する[14]．

ジョームとは対照的にC･ルフォーは原理原則を重視したフランス自由主義解釈を提示する．ルフォーによれば，フランス自由主義とは「同時に二つの種類の専制主義，つまり『旧体制の復活』及び『恐怖政治』と戦いながら，フランス革命の遺産を守る」立場を意味する[15]．ルフォールは絶対王政，社会主義国家などを専制政治モデルとして一括りに捉えると同時にフランス自由主義を立憲主義モデルの多様なあり方と結びつけその現代的意義を探る．

歴史と原理原則からフランス自由主義を説明するジョームとルフォールの二人の考え方の違いは，白か黒かの違いではなくニュアンスの違いに過ぎない．彼らはともにフランス自由主義とはフランス革命とは切っても切れない関係にあり，両者は卵と鶏のような関係にあることを認識しているからである．

ジョームの*L'individu effacé, ou le paradoxe du libéralisme français*（1997）は出版されて25年経つが現在に至るまでポスト冷戦期のフランス自由主義研究の基軸であり続けている[16]．ジョームは「法律と権力を倫理的に判断し，統制する権利」という倫理的自由を基軸に，1789年から1870年までの１世紀に渡り，フランスの多様な自由主義の潮流を分析した[17]．その結果，ジョームは政治的視点から19世紀フランスにおける自由主義を，主体の自由主義，国家の自由主義，カトリックの自由主義という3つのモデルに分類した．

ジョームによれば，19世紀フランスにおいて最も政治的影響が強かったのが，ギゾー，純利派，オルレアン派に代表される国家の自由主義だった[18]．彼らは国家の社会的，政治的影響力に基づいて社会を再編し，中産階級を主体とした「エリート主義的な自由主義，ないし名望家主体の自由主義」を形成した．これはガバナンスの視点からアプローチする，個人の国家に対する服従を前提として個人の自由を実現させるというユニークな自由主義である．イギリスやアメリカの自由主義とは矛盾する，反個人主義的なリベラリズムと言える．ジョームはモンタランベールなどのカトリックの自由主義でも国家による個人の保護に重心が置かれた点を強調する[19]．

ジョームによれば，これら２つの自由主義と趣を異にするのが，スタール，コンスタン，トクヴィル，プレヴォーストパラドルに代表される主体の自由主義である[20]．プロテスタント系の思想家を多く携えたこの政治潮流こそ，古典主義的自由

主義の考え方に最も近く，国家権力に対して自由を防衛するための大前提である個人の社会的権威に対する倫理的独立性を第一義とする自由主義である．しかしジョームは，この自由主義は中央集権化された肥大な行政国家が中心的な役割を演じるフランスの政治文化にあっては少数派だったと強調した．最後にジョームは主体の自由主義と古典主義的自由主義の違いについても触れ，主体の自由主義においてはドイツロマン主義の影響の元，個人の倫理的基盤として宗教感情を交えた個人の道徳が自由裁量の基盤となっていると説明づけた[21].

ジョームのフランス自由主義研究は大枠としてそれまでのフランスにおける先行研究を踏襲している[22]．安藤氏はジョームの研究のメリットについて，19世紀フランスにおける自由をめぐる政治的，知的，歴史的状況について豊富な第一次資料を使って深く掘り下げ「国家と自由の関係をめぐる苦闘を発掘し再認識」した点であると説明している[23]．また今日の視点から新たに認識できるジョームの研究のメリットとして，それが複雑で相互に有機的な関係すら持つ多様な19世紀のフランス自由主義の星雲を個人の倫理的自由を基軸として認識しやすい三つの政治モデルに還元させたことである．彼がフランス自由主義研究についての明確な三つのパラダイムを提示した結果，それに反応する形で，ポスト冷戦期のフランス自由主義研究が国際的な発展を遂げたことは間違いない．

ジョームの国家のリベラリズムの分析はそれ以前にすでに発表された，P．ロザンヴァロンの研究に負うところが大きい．それゆえ時代的には前後してしまうが，そしてロザンヴァロンのかつてのフランス自由主義研究についても言及しておく．彼はフランス革命後のフランスで市民，個人の社会的結合の問題が経済ではなく政治問題として浮上した事実を重視する[24]．政治哲学的ではなく社会学に特有な視点を重視し，選挙制度，教育，言論などの問題も憲法や人権宣言と同じぐらいフランス自由主義にとって重要なものであると考える[25].

このような視点からロザンヴァロンによるフランス自由主義研究の代表作の一つはLe moment Guizot (1985)であろう．本研究は上に述べた社会学的視点こそフランス自由主義がイギリスやアメリカの自由主義の伝統とは異なる点だと考え，その特徴をもっとも象徴的に担うギゾー，純理派にスポットライトを当てた.そしてジョームが後に国家の自由主義と呼ぶこととなる，典型的なジャコバン主義とは異なる政治モデルの具体的なあり方について提示した[26]．同時にロザンヴァロンはギゾー，純理派らの変わり種的自由主義のモデルのイデオロギー的源についてはジャコバン主義のそれと同一視し，フランス革命以来の文化的，政治的一元主義の源である国家の公益を主体とした一にして不可分の国民国家のイデオロギーに起因させた [27].

それゆえロザンヴァロンもジョームと同様に，ギゾーらの自由主義が個人や社会の多様な価値観を認めるものではなく，国家権力から個人の権利を守るという本来的な意味での自由主義的な性格を持ち得なかったという悲観的結論を導き出した[28]．その結果フランス以外の研究者から，19世紀リベロー（自由主義者）が表象した政治文化とは文化的，政治的一元主義に還元される一枚岩な政治モデルではなく，多様性を認める側面もあったという反論が挙がった[29].

代表的な研究者の研究内容に加え，誰を研究の対象とするかという視点からもフランスにおける過去 30 年の先行研究の動向を見直すことができる．F・フュレやF・メロニオらの修正主義派の政治思想史研究者にとって，フランス自由主義をもっとも象徴する政治思想家はトクヴィルだった[30]．イギリスやアメリカでは，冷戦終結以前からトクヴィルの政治思想史上の存在が認知されていたことについてはすでに述べた．しかしながらフランスでは，19 世紀末から 20 世紀後半までフランス自由主義研究の命運とともにトクヴィルも影の薄い政治思想家だった[31]．その後マルクス主義が衰退し修正主義が台頭する 1970 年代末から 1989 年までに，フランス自由主義研究と同様にトクヴィルの政治哲学が徐々に「再発見」された [32].

フュレやメロニオらは，トクヴィルの政治哲学の民主的な側面を強調し，彼の政治思想の貴族主義的な側面については言及しない[33]．そのためこのイメージこそポスト冷戦期のフランス自由主義研究におけるトクヴィルのイメージとなった．ではなぜ彼らはトクヴィルの思想の中で民主的な側面を強調したのだろうか．その一つの理由とは 19 世紀前半にトクヴィルが書いた『アメリカの民主主義』が 21 世紀初頭の現在をも見通した視野を持

っていたためである．しかしそれ以上に重要な理由は，フュレやメロニオが 20 世紀末の冷戦終結に自由主義的解釈を施す手立てとして 19 世紀半ばにトクヴィルが書いた『旧体制とフランス革命』からその共和主義的な側面を引き出したためである[34].

トクヴィルは『旧体制とフランス革命』において，旧体制とフランス革命が「持続している」と指摘した[35]．フランス革命後恐怖政治，ナポレオンの帝政という自由ではない政治体制が誕生したが，それはあたかも革命以前の旧体制を思い起こさせるようなものだった，との認識である．そしてフュレらはフランスにおける修正主義への転換点となった『フランス革命を考える』（*Penser la révolution française*, 1978）でこのトクヴィルの行政国家の肥大化と個人の自由の軽視という問題意識を 20 世紀末のフランスに復活させた．彼ら修正主義者にとってトクヴィルの批判は社会主義やマルクス主義に対する批判と重なったのである．それゆえフランスの修正主義者にとって，トクヴィルは 20 世紀末の冷戦終結において自由民主主義陣営を勝利に導いた思想史上の立役者となった．しかしそこには政治的恣意性があった．彼らは『旧体制とフランス革命』から巨大な行政国家が個人の自由に及ぼす弊害について強調したが，その行政国家と光と影の関係にある貴族的側面つまり社団（国家と個人の中間に位置する伝統的な社会組織）については多くを語ってはいないからである．

フュレはトクヴィルが，トクヴィルと同時代に生きた政治思想家，政治家とは何の思想的脈絡もない，孤立無援の，あたかも自分の時代からは浮いたリベラルだと強調する．しかし既存の政治ラベルに当てはまらないというトクヴィルのイメージは近年実証研究によって否定されつつある[36]．フュレらにとっては，これはトクヴィルを彼自身が生きた時代の問題意識から遠ざけると同時に 20 世紀後半の自身の政治意識に引き寄せる戦略だった．アメリカのデモクラシーの理論家として知られるトクヴィルはまさしくポスト冷戦期のヒーローにふさわしい．そして自身も本国と同様にアメリカでも歓待されたフュレを含むフランスの修正主義者たちはアメリカのデモクラシーのソ連に対する勝利の背後でひそかにフランス自由主義の政治的勝利についても祝うことができた．このように彼らのトクヴィル解釈とは何よりもまず 20 世紀末のフランス共和主義の問題意識を映し出したものだった[37].

先行研究（２）—アメリカ

フランスの研究者が，フランス自由主義研究に自国のポスト冷戦期における政治意識を投影させたことを指摘したが，この傾向はフランスに限ったものではない．アメリカでフランス自由主義に携わる研究者たちも，また自国の政治文化を批判するために，19世紀フランス自由主義研究に取り組む傾向がある [38].

アメリカの19世紀フランス自由主義研究者は，冷戦以前の80年代から拡大していった新自由主義に警鐘を鳴らし小さい政府の名の下に，個人の私的分野に国家が一切介入しないという政治傾向を強く否定する[39]．社会経済的格差を拡大させ，貧困層が行き場を失ってしまう現状に憂慮し，弱者を救済する手立てとして，積極的な社会政策を支持する．その結果単に個人の権利を攻防するための手続き的な側面を重んじる古典主義的自由主義とは異なる19世紀フランス自由主義に注目する．

この視点から，アメリカの研究者はフランスの政治文化を特徴付ける強力な中央集権行政国家の存在について，フランスの研究者とは異なる見方をする．個人の倫理的自律性が損なわれると恐れるフランス人研究者の見方に必ずしも賛同しない．アメリカの研究者は民主党寄りの視点から「個人が集団的制度に依存してこそ自由が可能になる」と考え，強い国家がリベラリズムのポジティブな起点になりうると解釈する[40].

この展望のもとに，アメリカの研究者によれば，フランス自由主義には二つのメリットがある．一つは，制度の具体的助けを借りることによって，個人の自由が物理的に可能になること，もう一つは，政治制度を通じて個人は自らが権利を持った市民としての自覚を促される，というものである[41]．以上に述べた傾向はアンチ新自由主義と言えるものである．

それに加えてアメリカの研究者は政治的人文主義を重んじる．アメリカでは近年J. ロックの自由主義を否定しつつ，マキャベリ以来の政治的人文主義がアメリカの共和制誕生にも重要なイデオロギー的役割を果たした，との議論が存在する．それゆえアメリカの研究者が政治的人文主義とフラ

ンス自由主義研究の関わりについて論じる時，彼らは同時にアメリカの政治文化，アメリカとフランスの共和主義についても必然的に問うこととなる．

イギリスで教育を受けたニュージーランド出身の歴史家 J・G・A ポーコックは『マキャベリアン・モーメント-フィレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統』（*The Machiavellian Moment : Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, 2008）において近世ヨーロッパにおいて，アリストテレスらの古典哲学を彷彿させるような公共の精神に基づく良き政治の概念が存在したことを突き止めた[42]．一方近世から近代にかけて，イタリアやイギリスに新たに共和国が樹立された．ポーコックはなぜ政治制度自体としては良好であるのにもかかわらず，これらの国々では政治的安定が得られなかったのかとの疑問を持ち，16 世紀のフィレンツェ共和国の統治に関与したマキャベリらに注目した．そしてマキャベリやタシトゥス派らはアリストテレスらの古代哲学からヒントを得て 16 世紀イタリアという乱世を統治するために「徳」の概念に着目し，教育によって「徳」を社会に植え付け政治状況を安定させることができる，と考え政治を安定化させようとした歴史的事実を突き止めた．

ポーコックによれば，その後マキャベリらの影響下，ゴードン，ボーリンブルックなどの政治理論家も政治的腐敗とその克服，徳，および政治的実践主義，英国古来の国政などを重視した政治思想を展開し，結果としてイギリスの市民戦争前夜にも政治的人文主義が顕在化したことを解明した．ポーコックによれば，その影響は大西洋を超えてアメリカ革命の政治文化にも影響を及ぼした．ポーコックの説はアメリカの独立革命が J. ロック以来の合理主義，自然法的哲学を前提とするという既存の解釈を覆し，イタリアルネッサンスと近世イギリスの文化史の影響を抜きにしてアメリカ革命について語ることができない，との新たな歴史認識を導き出した[43]．

アリストテレスにさかのぼる古典哲学やマキャベリやネオ・ハリントニアンと呼ばれるイギリスの政治哲学者たちがアメリカ革命に政治的影響を及ぼしたというなら，ではそれらはフランス革命とも何らかの関連性を持つものだろうか．ちなみにポーコック自身は近世フランスからフランス革命初期まで政治的人文主義の影響があったこと，しかしポーコックによれば古代憲法，古代人の徳などに代表される古代共和国言説の影響は，フランスでは変容された形で受容されたと曖昧に記している．ポーコックは 1791 年憲法が制定された時点でルネッサンス以来の政治的人文主義のフランス革命政治への政治的影響は終わったと理解したようである[44]．

ポーコックが投げかけた政治的人文主義とフランスの政治文化の問題をさらに公論の発達の視点から掘り下げたのが，K・ベイカーである[45]．ベイカーは 1750 年以後の絶対王政期のフランスにおいて公共性の思想が公権力側ではなく国民側へと移行しつつあったことを認め「公論の政治的発明」の歴史的誕生について分析しハーバーマスの理論とは異なる公共性についての考え方を明らかにした．

この公論の歴史的誕生と同時にベイカーは「古代人の徳」言説もマブリーやルソーなどの政治思想に表現されたことを認めた．ベイカーはフランス革命勃発後「古代人の徳」がフランス革命に対する対抗勢力というよりは，ジャコバン派を中心としたフランス革命派の言説に取り込まれ，「自由でない」共和国の建設に貢献したと解釈した[46]．しかしながら，ベイカーの主張には深刻な内部矛盾が宿った．アメリカとフランス革命が同じ古代人の徳言説に影響を受けたにも関わらず，相矛盾した政治的結果（自由な体制と恐怖政治）を引き起こしたことをどう説明すれば良いのだろうか．

この矛盾を解決すべく，フランス革命以後のフランス共和政における自由主義的な要素について政治的人文主義との関わりから論じたのが，A・ジャンチルによる *Reimagining Politics after the Terror :The Republican Origins of French Liberalism*（2008）だった[47]．ジャンチルによれば，政治的人文主義はフランス革命に影響を及ぼしたが，それはロベスピエールの処刑以後の 1795 年から 1804 年にかけてのことだったとみなした．そして彼は保守的な共和主義が建設されたこの世紀末の５年間を「フランスのマキャベリアン・モーメント」と名づけた．

ジャンチルによれば，恐怖政治後のフランスに穏和で保守的な共和政を樹立しなければならないという政治課題に直面した政治家や知識人たち（スタール，コンスタン，テレマン）は，左派寄

りの中道派として，革命フランスに新たな政治的方向を与え，共和主義とブレンドされたユニークなフランス自由主義を樹立した．ジャンチルは，彼らが近代共和国を構築する上で古代共和国言説が重要な役割を担ったとみなして「自由主義的共和主義」（liberal republicanism）と名付けた．ジャンチルによれば，それは特にプロテスタント系の共和主義者のスタールやテレマンの著作に表現されたという[48]．

つまりジャンチルは，恐怖政治後のフランスで政治的人文主義のリベラルな側面が出現したことを強調した．その結果，彼の議論はフランス革命以前の政治的人文主義と 19 世紀フランス自由主義との間に思想史上の持続性があることを正当化するものとなり，これはアメリカの研究者にとって意義深いことだった．なぜならトクヴィルやコンスタンらは「古代人の自由」を重視したが，ジャンチルは共和主義的自由主義の名の元に，彼らの思想の歴史的始まりを前倒しして直接的にフランス革命とつなげることができたためである[49]．その結果ジャンチルの共和主義的フランス自由主義はジョームの主体の自由主義とも繋がった．

近世の政治的人文主義と恐怖政治以後に誕生した自由で保守的な革命フランスの持続性を強調するジャンチルの研究は，一貫した主張に貫かれている．しかしそれゆえ彼の研究はイデオロギー的配慮によってあらかじめ構築されたかのような印象を与える．さらに言えば，彼の主張と歴史的事実の間にはギャップが存在する[50]．例えばジャンチルは徳の概念を古代人の自由と結びつけて論じるが，古代人の自由の考え方は恐怖政治後に突如出現したわけではない．ジロンド派たちが古代共和国をイメージしたフランス革命論を展開したという実証研究も存在する以上，ジャンチルが 1795 年以前のフランス革命政治における政治的人文主義の役割について沈黙を保つのは不自然である[51]．

ジャンチルは 1795 年以後スタールが共和国，徳などの抽象的で，古代共和国言説にも通じうる言葉を使ったことに着目し，彼女が恐怖政治以後の自由で穏和な共和国樹立のための政治的人文主義の先鞭を切ったと主張する．しかしスタールが使ったこれらの抽象的な概念は果たして本当に古代共和国言説，特に古代人の（政治参加による）徳に起因するのだろうか．スタールが恐怖政治以後の主眼が商業文明の発達を特徴とする近代社会の特徴を近代人の自由（政治にかかわらなくてもいい自由）と規定して古代人の自由と峻別するとともに，近代における古代共和国言説のアナクロニズムを何度となく指摘している以上，スタールの政治思想を政治的人文主義と関連づける議論は説得性に欠ける[52]．それに加えて，ジャンチルは同時代にスタールと最も活発な知的，政治的交流があった知識人の集団，イデオローグたちの徳の概念については沈黙を保つ．そこには感覚主義哲学に由来するイデオローグの哲学とスタールのプロテスタント信仰と結びついた自由主義思想を餞別しようとする意図があると考えられるが，それにしても総統政府の時代に最も政治的影響力を持ったイデオローグについて，彼らと政治的人文主義の関係性について全く触れないのは不自然である[53]．

政治的人文主義とフランス自由主義との関わりでもう一つのユニークなアメリカ発の研究は A・カリヴァスと I・カッツネルソンによる *Liberal Beginnings : Making a Republic for the Moderns* (2008)である[54]．カリヴァスとカッツネルソンによれば，蛹が成虫に変化するように，19 世紀ヨーロッパの政治的人文主義は古典主義的自由主義へと変化を遂げたという．その鍵となったのは，世紀の転換期を生きて最終的には共和主義を捨てて自由主義へとまいもどったスタールの政治思想だったという[55]．彼らによればこの歴史的モーメントを基軸としてそれ以後，ヨーロッパスケールの古典的自由主義が形成されていった．その結果 1830 年以後は政治的人文主義が姿を消して，古典的自由主義が根をおろすことになった．彼らの議論の功績はリベルタリアンとコミュノタリアンの二項対立的な議論を超えて，あくまで近代史における共和主義と自由主義の関係を捉えた点である．しかしながらフランス自由主義を古典主義的自由主義の一形態として捉えることによってフランス自由主義の独自性をも否定してしまったことには疑問が残る．

このようにアメリカのフランス自由主義研究においては政治的人文主義が重要なテーマの一つとなっているがこれは日本でも重要な研究テーマである．宇野氏による『デモクラシーを生きる』（1998）はトクヴィルの自由の概念に焦点を当て「いかなる点において古典的なものを引き継いで

いるのか」についての考察を重視するが，これは政治的人文主義的解釈に連動するものである[56].

最後にHelena Rosenblatの研究は19世紀フランス自由主義をリトマス紙として現状のアメリカ政治を批判するもう一つの事例である.近年邦訳された『リベラリズム　失われた歴史と現在』(2020. 原題は *The lost history of liberalism*, 2017)はフランス革命とともに誕生したリベラリズムという言葉が20世紀初頭までに多種多様な意味を持つようになったことを歴史的に実証した貴重な研究である．同時にそこには常に現状のアメリカ政治に対する批判がついてまわる.その結果結論でRosenblattは「今日アメリカのリベラリズムはあまりにも個人の権利に偏り本来（コンスタンやスタールらによる）大陸ヨーロッパのリベラリズムが特徴とする道義的な意味あいとの関わりを失ってしまった」と指摘した.Rosenblattは19世紀フランス自由主義思想の道義的側面を強調しつつ現代アメリカの自分勝手なリベラルたちを批判している.その結果彼女の19世紀フランス自由主義論にはその目的以外の側面，例えば立憲主義的側面などが削げ落ちている．[57]

先行研究（３）—イギリス

イギリスはアメリカやフランスよりも 10 年以上も早くフランス自由主義研究に取り組んだパイオニア的存在である．それゆえポスト冷戦期以前になってしまうが， I・バーリンによる消極的自由，積極的自由についての『二つの自由』(1968) についてもあらかじめ触れておく必要がある[58]. バーリンの消極的自由とは個人が行動する際外部から「障害，障壁，強制がない状態」のことを指す[59]. その一方で積極的自由とはある内的規範の許に自身の人生をコントロールしつつ行動することを意味する．また積極的自由においては，個人の人生の基本的目的を達成するために自己を抽象化された個人としてではなく，共同体のメンバーと捉える傾向がある，という[60]. 19世紀の自由主義は個人の国家権力からの自由を求めるという意味では消極的自由に呼応する．その一方で，20世紀のリベラリズムの支持者は何らかの形で国家が介入してこそ個人の自由が叶うと考えるため，積極的自由を評価しやすい．同時に積極的自由については，殊に冷戦期においては，社会主義政権による政治的独裁制が想定されうるため，その解釈を巡って様々な議論が巻き起こった[61]. 以上の文脈の元で，バーリンはフランス自由主義者のコンスタン，トクヴィルを消極的自由にコミットした政治思想家として取り上げた．そして彼らがルソーとは異なり公私の二つの局面を厳密に区分することによって 20 世紀の自由主義のパイオニアであることを強調した[62].

冷戦期のイギリスはマルクス主義によるフランス革命の解釈についても疑問を呈した．そしてフュレらよりも 10 年以上も早くイギリスの社会史の A・コバンは 1950-60 年代に手堅い実証研究によってフランス革命とマルクス主義の関係性について否定した．フュレのイデオロギー的解釈に基づいた修正主義は，コバンの実証主義の上に成り立っていると言ってもいいだろう．

コバンはフランス革命における大衆運動とこれらを引導した政治エリートの社会学的分析を通じて，生産手段，社会階層，社会的流動性や生活水準の点で旧体制とフランス革命の政治エリートに大差がないことを実証研究として明らかにした[63]. その結果コバンは当時全盛を誇っていた経済，社会構造の変化を主体としたブルジョワの起業家が旧体制の貴族に対してフランス革命を起こした，というお決まりのマルクス主義的フランス革命の史的解釈が史実に即していないこと，フランス革命は経済ではなく，何よりも政治的性格を持った革命であったことを強調した[64].

その結果イギリスではバーリンとコバンらを中心とするパイオニア的研究を元に独自なフランス自由主義研究が他国よりも一足早く始まった．L. シーデントップのフランス自由主義研究にはバーリンの思想的影響のもとに独自な視点が宿っている．シーデントップの『二つの自由主義の伝統』(*Two Liberal Traditions*, 1979 年）というタイトルはバーリンの『二つの自由の概念』を想起させる[65]. コバンの発表から 10 年後，シーデントップはバーリンの消極的自由の概念を修正して，フランスにおける消極的自由が必ずしも「separate spheres」によって立つものではなく社会学的インプリケーションを持つものだったと提案した．そしてバーリンが積極的，消極的自由を対比させたこととは対照的に，シーデントップはこれらの二つの自由とは異なり，広い意味での自由の文化的源泉として社会風習について論じた．

その結果シーデントップはより踏み込んだ形でイギリスとフランスにおけるフランス自由主義の捉え方の相違について明らかにした．シーデントップは，ギゾーらの純利派，トクヴィル，スタールらのフランスの自由主義の伝統を挙げ「社会学的論議様式」として分類した [66]．シーデントップはバーリンの議論を強く意識しつつ，イギリスやアメリカのリベラリズムの伝統が消極的自由の抽象化を免れ得ないこと，そしてその相対モデルとしての 19 世紀フランス自由主義の特徴として「社会学的論議様式」について論評した．それは人間の社会的本質性を強調し，自由をより複雑なものとしてかつそれを可能にする具体的な社会的諸条件を歴史的視野の元で考察し，政治制度や政治理念の変化も現実の社会構造変動と関連づけて考察するというものだった．

シーデントップによればフランス自由主義が英米の自由主義において指摘される自由の概念が抽象化を免れた理由として，立憲主義に加えて目に見えない形で習俗が自由を支えたためであると指摘した [67]．モンテスキューやチュルゴーのようなフランスの自由主義的政治思想家たちが法律と習俗，または政治と社会の構造を明確に区別していたこと，その結果フランスではイギリスとは異なる自由の伝統が存在したと説いた [68]．シーデントップによれば，革命以前の自由を支える風習は革命後「自由な風習」へと変化していったが，それは「社会において市民的自由と政治的自由が相互に結びつき，それぞれの概念をお互いが促進するような時代において，個人に培われる態度や習俗である」[69]．シーデントップによれば「自由な習俗」という概念に最も注目した政治思想家はスタールとトクヴィルだった [70]．

シーデントップの習俗を主体とする自由の概念は現在まで学術的影響を及ぼし続けている[71]．ルーマニア出身で現在アメリカの大学で教鞭を取る A クレイユチュや武田は習俗の概念や社会風習の一形態として「節度」の概念に注目し，フランス自由主義を右派左派による二極構造ではなく，フランス自由主義を中道，中庸主義に基づく「節度のリベラリズム」として捉え直した [72]．その意味では，これらの研究はシーデントップの社会学的アプローチの延長線上にある研究である．

古典主義的リベラリズムの発祥地であるイギリスは，独自のリベラリズムの伝統を持つ．また 19 世紀を通じてフランスのように異なる政治モデルが競合する，という政治的不安定さを経験することもなかった．第二次世界大戦以後に制度化された社会福祉制度を除けば，国家が市民社会には介入しないことを一貫して是と捉えられ経済的自由主義が重んじられる．その傾向は 1980 年代のサッチャー首相の登場以来さらに強まった．イギリスの研究者は戦後の社会福祉を重視する政治的傾向がまだ強かった 1960 年代に，マルクス主義に対して自由主義を重んじつつイギリスやアメリカの経済主義的自由主義とは異なる政治を主体とするユニークな自由主義をギゾー，スタール，トクヴィルらフランスのリベローの政治思想に見出していた [73]．

とりわけシーデントップに続いてイギリスの研究者は習俗の視点からスタール，ギゾー，トクヴィルのつながりについて強調する傾向にある [74]．それとは対照的に，フランスでは 20 世紀前半からポスト冷戦期を象徴することとなるジョームの研究に至るまで，政治哲学的視点のもとに，ギゾーとトクヴィルの政治思想を水と油のように異なるものとみなすコンセンサスが存在する[75]．その主な理由は国民主権の概念を重視する立場か否かという点に集約される．同時にフランス自由主義の主軸となる政治的自由主義，つまり立憲主義的政治モデルの視点から見た時市民的自由，市民社会を重視する立場から見た時両者には共通項もある．ギゾーとトクヴィルをどう捉えるか，という問題こそがイギリスとフランスのフランス自由主義研究の違いを象徴する.本論文で見てきたことからその理由は思想上の問題である以上にイデオロギー上の問題に起因するように思われる．

最後にフランス自由主義研究との関わりにおいて，第二帝政についてのイギリスとフランスをめぐる先行研究の動向についても付け加えておく．フランスでは 20 世紀を通じて第三共和制が神格化された．それとは対照的に，クーデタによってナポレオンの甥が開始したその前の政治体制，つまり第二帝政の時代は長期にわたって暗黒の時代とみなされ，横に追いやられる傾向があった [76]．近年修正主義の台頭によってフランスでも第二帝政の自由主義的な側面について実証研究が出版されるようになった[77]．しかしイギリスではギゾー研究と同様，すでに 1960 年代に第二帝政を自由主義的に分析した優れた実証研究が出版されている

[78]．現代フランスを特徴づける第二帝政についての修正主義的研究は 50 年のインタバルを持ってイギリスの学術的傾向に追従しているとも言える．つまりマルクス主義の強い影響を受けて 19 世紀フランス自由主義を拒絶したフランスの研究者に変わって，イギリスの研究者が冷戦期の 19 世紀フランス自由主義研究を支えた．

一面において，イギリスにおけるフランス自由主義研究は，ポスト冷戦期ではなく冷戦期影響のもとでピークに達した．一方今日のイギリスは 19 世紀フランス思想史に限定されることなくより広い 18 世紀ヨーロッパおよびスコットランド啓蒙哲学の視点から経済的自由主義を歴史的に見直す研究が活発である．フランス自由主義研究もこの文脈に位置付けられるが J・B・セイ，コンスタン，スタールなどの個人の知的評伝を通じた個別の事例について取り上げられる傾向が強い[79]．しかしながらイギリスの研究者による個人をベースとするフランス自由主義研究はともすれば統一性の視点を失う危険性がある．同時にこのような状況は経済的視点による包括的なフランス自由主義研究が困難であることを浮き彫りにしている．なぜならフランス自由主義とは元来経済ではなく政治が先行する思想だからである．

それとは対照的なのが安藤氏の『フランス自由主義の成立―公共圏の思想史』（2007）である[80]．革命以前の自由主義的な経済史からロザンヴァロンらの 19 世紀フランス自由主義までの歴史的変貌についてベイカーやハーバーマスが論じた「公共圏」という概念を介してその持続的な歴史的成立過程について分析した氏の研究には経済史と政治史が混在している．なぜならイギリスでは商業文明から発達した公共圏がフランスで合法化されるには政治の力が必要とされたため革命前の経済，社会史の議論を革命後のより政治的意味合いの強いフランス自由主義へとつなげたためである．またアメリカ，フランス，ドイツ，イギリスなどの研究を総合した氏の研究を国ごとの分類に位置付けるのも困難である．安藤氏は経済，社会的視点から出発して政治的インプリケーションを含む包括的なフランス自由主義についての解釈に成功した．同時に政治と距離を置く氏の研究はポスト冷戦期の政治に対する関心が直接的に研究内容に反映されにくい内容である．それゆえここではイギリスの経済的自由主義の研究とのつながりを重視する．

（4）保守主義からの挑戦

近年フランス自由主義研究はかつての勢いを失いつつあるように見える．そこには現在の世界情勢も影響を及ぼしている．過去 30 年間に社会とは国民国家の枠を超えて多元化するとともに，財政問題，グローバル化，環境やエネルギー問題などの主要問題において一国で取りうる政策の範囲が激減してした．その結果国家間の国際協調がますます欠かせなくなりつつある．その一方で，内戦が引き起こす人の移動，テロ，経済危機，グローバル化による先進諸国の社会，政治問題は深刻さを増し，これらの問題に対処する上で国民国家を主体とした議院代表制の限界が露呈した．同時にグローバル化への反発が世界各地で起こり，アメリカのトランプ政権の誕生やそれに伴うアメリカの TTP からの脱退，イギリスの EU 脱退などに象徴されるような国民国家の見直しを促す動きが起こっている．

国際間の協力がこれまで以上に必要となり国内政治の限界が認識される一方で，人々の意識は国民国家へと回帰しつつある．その結果，先進諸国ではおしなべて保守派，もしくは極右派の政治勢力が増している．ヨーロッパでは，フランスのマクロン大統領やドイツのメルケル首相による保守中道の政権が誕生した．日本でも自民党の保守派勢力が政権を握っている．要するに，先進諸国においては，近年保守主義が自由主義に変わって優勢になった感が強い．

保守政権の誕生や，保守派の政治勢力の拡大は，人々が伝統への回帰を望んでいることを示している．移民問題，グローバル化，環境問題など国際的な共通課題が国内政治の自由度を狭めている中で，社会的紐帯の問題が国内の主要政治問題としてクローズアップされ，その結果，変化を受け入れつつも，現存の社会をつなげ持続させることの方が，分断，断絶などに象徴される革命よりも重要な政治課題となった．時代の動きを反映して，研究者たちは自由主義ではなく保守主義の見直しへと研究対象をシフトさせつつある．このような世界的傾向はフランス革命を経て過去 200 年もの間左派の政治文化が右派に比べて常に優勢だったフランスにおいて最も顕著である [81]．

現在のフランスで保守回帰を最も象徴しているのがフランス革命についての史的解釈である．出版社 le Seuil は自社の人気歴史シリーズである *Histoire de la France contemporaine*（現代フランス史，全 10 巻，2012-）の内容を大幅に改編した [82]．それまでのバージョンは 1970 年代のマルクス主義から修正主義への移行期に書かれたものだった．1970 年代と 2010 年代に書かれた *Histoire de la France contemporaine* の内容を比較すると両者の内容の相違に驚かされる．1970 年代のバージョンは 1789 年のフランス大革命の説明から始まっていることから 1789 年の大革命がフランス近現代史の始まりとして位置付けられていることは明白である．

それとは対照的に 2012 年のバージョンは 1799 年から始まり，それ以前のフランス革命の激動の 10 年間はすっぽり省略されている．ナポレオンによるクーデタから始まる新版の編集の仕方から，もはや現代フランスにおいてフランス革命が現代史のスタートポイントとはみなされていないことが読み取れる．同様のことが 19 世紀の二つの革命についても言える．新版の２巻では 1830 年と 1848 年にそれぞれ勃発した７月革命と２月革命について最小限の説明しかなされていない．とりわけなぜこれらの革命が起こったかについては，経済的要因に軽く触れられている以外，政治的因果関係については触れられていない[83]．

フランスの大手出版社 le Seuil 社が出版した『現代フランス史』はフランスの学部レベルの大学生が読む歴史教材である．つまりそれは専門家ではなく一般読者を想定して編集されたシリーズであり，最新の歴史研究の結果を盛り込んだ教科書的な役割を持つ．そのような基本的な自国の歴史についての解説書において，かつては冒頭にあったフランス革命についての章が削除され，これまで革命の世紀として理解されてきた 19 世紀フランスはより静的な時代として描かれている．このような変化は，現代のフランス社会におけるフランス革命の立ち位置が揺らいでいることを如実に物語っている．

フランス革命研究が下火になれば，当然フランス革命と卵と鶏の関係性を持つフランス自由主義研究の勢いも衰える．近年ではベルギーの研究者によって，超王党派の中にこそリベローが存在した，との主張もなされているほどである．ベルギー出身の A・ドジンの *French Political Thought from Montesquieu to Tocqueville :Liberty in a Levelled Society* (2008)によれば，王政復古期の超王党派の一部には「貴族が中間団体として存在することによって旧体制には自由が存在した」というモンテスキューの議論を盾にして，伝統貴族を政治的に復活させることによって市民的自由を樹立させることができる，と考えた自由主義の一派が存在したという[84]．ドジンの主張は，間接的にフランス自由主義とフランス革命が別物であることを示唆しており，かなり非主流派の研究に属する．同時にドジンは英国憲法の理論家および賞賛者としてではなく王政擁護派としてのモンテスキューのイメージを強調することによってフランス自由主義研究における新たな自由のあり方を提示した.先行研究においてはパングルとラヘがモンテスキューを自由主義的共和主義モデルと結びつけて論じたてきたからである.モンテスキューとフランス自由主義の関係性については重要なトピックであり別の機会に先行研究を整理する所存である．

これまで 19 世紀フランス自由主義研究が現状に対する鏡として機能したことを指摘した．それゆえフランス革命とフランス自由主義の因果関係が否定されれば現代という保守の時代にフランス自由主義研究を続ける政治的意義はもはや存在しないとの見方も成り立ちうる．そこには保守と自由主義を別物とみなすという前提がある．確かに政治学上の概念として保守主義と自由主義は明確に線引きされる．それゆえ 19 世紀フランス史でも保守革新もしくは右派左派の二極対立の図式が強調されてきた．しかし両者をシーデントップの「社会学的論議様式」に従って「中道勢力」とみなすことによって保守派と自由主義者の対立は解消する．

この点について，フランス自由主義の研究者の W・ローグは次にように書いている．

> 「自由主義（中道派を意味する）を無視するこの傾向は，19 世紀後半のフランス政治思想が左右両極に分かれているというイメージをもたらした．しかし，それは決して当時の特徴を忠実に映すものではない．フランスの中道の政治思想家はしばしば，中道の政治思想者と同様に，無視されるという運命を被

てきたが，しかし政治的中道の立場を考慮することなしには近代フランス史を理解することができないのである」[85]．

ローグが指摘したとおり，実際に 19 世紀フランスでも保守派と自由主義者による中道派が政治的な重要性を担った歴史的モーメントがあった[86]．それは第二帝政の議会の自由化が叫ばれるようになった 1860 年代のことだった．この時代の中道勢力の形成は二月革命の反動だった．この革命で社会主義者が私有財産制を否定した結果，政治エリートたちは自己財産を守るべく保守化した．何よりも彼らは革命を恐れて貧者と富者の社会的紐帯の温存を重視した結果，社会的分断を助長したフランス革命に対して完全に背を向け，フランス革命史自体が影を潜めた．フランス革命史の解釈から現状の政治状況を読み取るとすれば，1860 年代の状況は現在のフランスの状況と酷似している．

この例外的な中道主義の時代を除けば，第二帝政が終焉する 1870 年までフランスでは保守派と自由主義者は対峙し続けた．自由主義者たちは合理主義，宗教的寛容，市場経済，議院代表制によってこそ自由を実現できると強く信じる一方，保守主義者たちはこれらの変化によって，既存の宗教，社会的階層，社会秩序自体が危機に瀕すると考えた．しかしながら 20 世紀中盤までに両者は歩み寄りを見せ中道勢力を形成させ始めた．そして 1970 年代以来フランスでも「中道の共和国」が誕生し保革共存内閣であるコアビタシオン（*cohabitation*）も誕生した．同時代からフランスで 19 世紀フランス自由主義研究が復活したことは，従って，単なる偶然の一致ではない．

結論—フランス自由主義とは何か？

本論文は，主に過去 30 年のフランス，アメリカ，イギリスなどの主要先進国の研究者による 19 世紀フランス自由主義研究を総括した．この時代はポスト冷戦期のロジックに支配され，共産主義亡き後の時代に見合った自由主義の時代のための自由主義の模索に費やされた 30 年だった．そこには国際的な環境に加え，個々の国々の政治文化も色濃く反映された研究が展開されたことを指摘した．

特に冷戦終了後のフランスとアメリカで極めてイデオロギー的要素の強いフランス自由主義研究が展開されたことを指摘した．それはこの時代に両国が新たな共和国像を模索したことを示唆した．フランスでは多民族主義が台頭した結果それまでの「一にして不可分」のジャコバン国家が時代の要請に見合わなくなりそれまで忘れ去られた自国の政治的自由主義の歴史的伝統に関心が向いた．アメリカではロックに由来する従来の自由主義の代価をマキャベリの共和主義に見出した結果フランス革命についてもこの視点を重視する傾向にある．それに加えて新自由主義などの経済イデオロギーに対する反動として民主党寄りの研究者たちが 19 世紀フランス自由主義研究を通じて国家が社会問題に積極的に介入する新たなアメリカ共和国像を模索し続けている．

現在世界はより保守的要素の強い時代に突入し，フランス自由主義研究もかつての活気を失いつつあるように見える．しかし保守の時代に入ったからと言って，冷戦期以来国際的に発達したフランス自由主義研究の現代的意味が薄れたわけではない．その根拠として 200 年以上の伝統を持つフランス自由主義の歴史において，著者は保守主義との交流を保ちながらフランス革命の精神的遺産を攻防した保守的リベラリズムの存在を指摘した[87]．

最後に以上の国別および近年の傾向を反映した先行研究の総括の結果，フランス自由主義の定義について再考する．フランスの研究者は 19 世紀フランス自由主義とは政治思想と歴史という二つの要素を行き来する存在であると定義づけたことについてはすでに指摘した[88]．一方イギリスやアメリカの研究者として W．サリンジャーと G．コンティは近年のフランス自由主義研究を総括し，フランス自由主義とは 19 世紀フランスに限定され，それは二つの要素から成り立っているとみなす．第一にフランス革命以来の自由な政体に関する憲法，第二宗教を含めた 19 世紀フランスの政治文化である[89]．

これら二つのフランス自由主義についての定義はまったく同じとは言えないが 19 世紀フランスが主体となっているという点において共通点を持つ．それとは対照的に，本論文はフランス自由主義研究とは過去を語ることによって現代的な政治傾向を浮き彫りにする鏡の役割がある点について指摘した．つまりフランス自由主義とは単に 19 世紀という時代的枠組みの中で理解されるべきもの

ではなく，今日を生きる研究者たちが共通の国際文脈や異なる国内政治状況に対峙しつつ現状におけるあるべき自由主義の模索をフランス革命の歴史哲学として表現しそれをフランス自由主義にも反映させる傾向がある．このような傾向は歴史学全体に読み取れるものであるが，フランス自由主義はこの点において明確な知的伝統を持つ点で独自な立場を持つ，

モンテスキューやブーランビリエは古代憲法言説に則って歴史主義の名のもとに絶対王政を批判した．スタールはこの知的伝統の上に「歴史によって政治を語る」自由主義的フランス革命史を展開させた．そして今日のフランス自由主義研究に関して言えば，フランスを中心として研究者たちはフランス革命について沈黙を保つことによって現状の社会的，経済的な分断から目を背けつつ，国民主権に根ざした国民議会ではなく王政の改革に根ざした議会制度の導入の歴史的プロセスを強調することによって，現在あるべき，許容範囲内の自由な社会について論じる傾向にある．それゆえ，フランス自由主義の定義として過去の政治思想という鏡に現代が反映されるという極めてユニークな側面を持つ政治思想史の一ジャンルであるとの定義も成り立つ．

謝辞

本論文は 2020 年度大妻女子大学個人戦略研究費 S20507 によって実現した．大妻女子大学および丁寧に読んで大変に貴重な助言を与えてくださった二人の査読者に対して深く感謝の意を伝えたい．

注

[1] Francis Fukuyama, “The End of History?, ” *The National Interest*, No. 16 (Summer 1989), p.3-18; Fukuyama, *The End of History and the Last Man* (Harper Perennial, New York;Reprint), 1993.　フランシス・フクヤマ『歴史の終わり』上下，渡辺昇一訳，三笠書房，1992 年.

[2] アメリカの「明白な運命」と冷戦の関係については，西崎文子「『明白な運命』の終焉-さまよえるアメリカ外交」『世界』（岩波書店）1998 年 4 月号，p.196.

[3] 西崎「『明白な運命』」p.196.

[4] フランシス・フクヤマの立場の変化については，フランシス・フクヤマ「歴史は本当に終わったのか」『日本経済新聞』，2015 年 1 月 3 日.

[5] ポスト冷戦期を特徴づけたフランス自由主義研究についての論文を見るとその国際性について認識できる．*French Liberalism from Montesquieu to the Present Day*, ed.Raf Geenes and Helena Rosenblatt, (Cambridge: Cambridge U.P), 2012. *Coppet, creuset de l’esprit libéral*, ed. Jaume Lucien (Paris and Marseille: Economica and Presses universitaires d’Aix-Marseille), 2000. *Revue française d’histoire des idées politiques :Les idéologues et le groupe de Coppet* », vol.2-18, 2003. 三浦信孝（編）『自由論の討議空間：フランス・リベラリズムの系譜』，勁草社，2010. *Les libéralismes, la théorie politique et l’histoire*, ed.Siep Stuurman (Amsterdam: Amsterdam UP), 1994.

[6] 宇野重規，『政治哲学へ：現代フランスとの対話』東京大学出版会，2004, p. 185-188.

[7] Raf Geenes and Rosenblatt Helena, “French liberalism, an overlooked tradition? , ” *French Liberalism from Montesquieu,* p.1-14 . Helena Rosenblatt, “Why Constant? A Critical Overview of the Constant Revival, ” *Modern Intellectual History*, volume 1-3, November, 2004, p.9.

[8] Lucien Jaume, “The unity, diversity and paradoxes of French liberalism,” *French Liberalism from Montesquieu,* p.36-54.

[9] François Mélonio, *Tocqueville et les Français* (Paris, Aubier, 1993), p.38-39.

[10]宇野重規，『政治哲学へ』，p.174-199.

[11]本論文ではフランス自由主義研究のパイオニア的存在のイギリスについては主に冷戦期の研究について述べる．

[12] 三浦（編），『自由論の討議空間-フランスリベラリズムの系譜』．宇野，『政治哲学へ』.

[13] 井上達夫・古賀勝治郎，「自由主義」，『岩波哲学・思想事典』岩波書店，1998 年．Berthier de Sauvigny, G. de, “ Libéralisme. Aux origines d’un mot ” *Commentaire,* no.7, automne 1979, 420-424. Jaume, *L’individu effacé,* p.11-15. Chinatsu Takeda, *Mme de Staël and Political Liberalism in France* (Singapore, Palgrave, 2018), p.4-5.

[14] Jaume, “The unity, diversity and paradoxes of French liberalism, ” *French liberalism from Montesquieu,* p.38.

[15] Claude Lefort, “Libéralisme et démocratie” *Le*

temps présent (Paris, Berlin), 2007, p.746.
[16] Lucien Jaume, *L'individu efface ou le paradoxe du libéralisme français* (Fayard, Paris), 1997. ジョームのフランス自由主義についての解釈の批判的解説については Jeremy Jennings, "Constitutional Liberalism in France, " *The Cambridge History of Nineteenth Century Political Thought,* ed. Stedman John Gareth and Gregory Claeys (Cambridge: Cambridge U.P. , 2011), p.360-373. Aurelian Craiutu, *Centre introuvable : La pensée politique des doctrinaires sous la Restauration* (Paris, Plon), 2003, p.263-283.
[17] Jaume, "The Unity," p.42.
[18] Jaume, *L'individu effacé,* p.119-170.
[19] Ibid. p.2-3 安藤隆穂,『フランス自由主義の成立:公共圏の思想史』名古屋大学出版会, 2007, p.2-5.
[20] Jaume, *L'individu effacé,* p. 25-118.
[21] Ibid. p.58.
[22] ポスト冷戦以前の代表的なフランス自由主義に関する先行研究としては André Jardin, *Histoire du libéralisme politique* (Paris : Hachette), 1985. ジョームの研究についての解説は，安藤,「序章：公共性とフランス自由主義」,『フランス自由主義』, p.1-14.
[23] 安藤,『フランス自由主義』, p.3. ジャコバン派もギゾーのリベラリズムも樋口陽一の分類によれば『トクヴィル＝アメリカ型の多元的デモクラシー』ではなく『ルソージャコバン型の単一共和国』に属する．樋口陽一,『自由と国家-いま「憲法」の持つ意味』(1989)
[24] Ibid. p.75-82.
[25] Pierre Rosanvallon, *Le modèle politique français. La société civile contre le jacobinisme de 1789 à nos jours* (Paris : Seuil), 2004.
[26] ロザンヴァロンの研究は時系列的にはジョームの研究よりも先に発表されたが，主にギゾーや純理派を扱い，ジョームの研究とは異なり 19 世紀フランス自由主義についての包括的な内容ではないため，本論文ではジョームの後に紹介する．Pierre Rosanvallon, *Le moment Guizot* (Paris, Gallimard), 1985.
[27] Rosanvallon, "François Guizot and the Sovereignty of Reason," *Democracy Past and Future (Columbia Studies in Political Thought/Political History),* ed.Samuel Moyn (New York, Columbia U.P.), p.117.
[28] Pierre Rosanvallon, *La contre-démocratie. La politique à l'âge de la défiance* (Paris : Seuil), 2006 ; Rosanvallon, *Le bon gouvernement* (Paris : Seuil), 2015. ロザンヴァロン，宇野重規解説,『良き統治-大統領制化する民主主義』みすず書房，2020.
[29] Takeda, *Mme de Staël and Political liberalism.* Annelien de Dijn, *French Political Thought from Montesquieu to Tocqueville* (Cambridge: Cambridge U.P.) 2011.
[30] François Furet, *Penser la Révolution française* (Paris, Gallimard) 1978; Furet,"The intellectual origins of Tocqueville's thought, " *Tocqueville et l'esprit de la démocratie*; Furet, "*L'Ancien Régime et la Révolution, "The Tocqueville Review: La Revue Tocqueville,* Presses de Sciences po, 2005, p. 121-140. Françoise Mélonio, *Tocqueville and the French* (Charlottesville and London, Virginia U.P.), 1998, p. 143-148. (先に挙げた *Tocqueville et les Français* の英訳)
[31] 戦後のフランスでは概ね全ての知識人たちがマルクス主義の強い影響を受けたが，唯一の例外がレイモン・アロンだった.
[32] トクヴィルの政治思想の先行研究は，宇野重規『デモクラシーを生きる-トクヴィルにおける政治の再発見-』創文社，1998, p.8-12 ; 宇野,『政治哲学へ』, p.185-188 ; 宇野,「トクヴィルとネオ・トクヴィリアン」,『自由論の討議空間』, p.205-236.
[33]Mélonio, *Tocqueville and the French,* p.92-94. François Mélonio, " Tocqueville : aux origines de la démocratie française, *The Transformation of Political Culture 1789-1838,* " ed. François Furet and Mona Ozouf (Oxford : Pergamon), vol.3., 1990, p.595-609. メロニオの民主主義的解釈はトクヴィルをバークと決別させることに象徴される．"…Mélonio treats these and others of Tocqueville's ideas…He (Tocqueville) set aside Burke, who had not understood that tinkering and reform would not have helped. " Ibid. p.588.
[34] フランソワ・フュレ『フランス革命を考える』大津真作訳，岩波書店，p.239-294. François Furet, *Penser la Révolution française* (Paris : Gallimard), 1978.
[35] Alexis de Tocqueville, "l'Ancien Régime et la Révolution", vol.II, 3-3 XVIII, *Œuvres, Collection*

Bibliothèque de Pléiade（Paris : Gallimard）p.246.

[36] フュレの指導によって博士論文を書いたアメリカ人の歴史家ガネットが，最も明確に「トクヴィルが自分の時代の中で孤立した思想家だった」と言う説を強く打ち出している.「歴史家としてのトクヴィルのキャリアはこれ以上にないほどの個人主義に貫かれていた.」 Robert Gannette, *Tocquevile Unveilled : The Historian and His Sources for The Old Regime and the Revolution,* (Chicago and London), 2003, p.27. フランスの修正主義的歴史家とは一線を画す修正主義的な視点からのトクヴィル像として Annelien de Dijn, "The Intellectual Origins of Tocqueville's *l'Ancien Régime et la Révolution*", *Modern Intellectual History,* 5-1 (2008), p.1-25. 特に p.1-3 を参照.

[37] フュレを含むフランスの修正主義者たちは，トクヴィルが参考文献について明かしていないという理由から同時代人たちの考えと関連づけることはできないと主張する. Furet François, "Chapitre 4 / The intellectual origins of Tocqueville's thought : *Tocqueville et l'esprit de la démocratie,* " *The Tocqueville Review/ La Revue Tocqueville*（Paris, Presses de Sciences Po), 2005, p. 121-140. フュレの主張に対して武田はトクヴィルが現存の公共圏，つまり公論に沿って著作したと考えれば，少なくとも彼の政治思想や歴史観について同時代の世論と比較することはできると考えた. Takeda, *Mme de Staël and Political Liberalism,* p.261-322.

[38] Helena Rosenblatt, *The Lost History of Liberalism: From Ancient Rome to the Twenty-First Century* (Princeton: Princeton U.P.), 2018.

[39] Geenes and Rosenblatt, "French liberalism, an overlooked tradition?" p.12.

[40] Ibid. p.10.

[41] Ibid. p.10.

[42] John Greville Agard Pocock, *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition* (Princeton, Princeton U.P.), 1975. 邦訳は J. G.A. ポーコック,『マキャベリアン・モーメント-フィレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統』, 田中秀夫, 奥田敬, 森岡邦泰訳, 名古屋大学出版会，2008.

[43] Jacob Soll Pocock, "Maciavellian Moment, J. G. A. Pocock's Republicanism Thesis Revisited: The Case of John Adam's Tacitism, Republic of Letters," *A Journal for the Study of Knowledge, Politics, and the Arts,* vol.2-1, p.1.

[44] Pocock, *The Machiavellian Moment,* p.427. 576 ページの脚注 52 を参照のこと.

[45] Keith Michael Baker, *Inventing the French Revolution. Essays on French Political Culture in the eighteenth century* (Cambridge: Cambridge University Press) 1997.

[46] Baker, *Inventing,* p.128-152.

[47] Andrew Jainchill, *Reimagining Politics after the Terror: The Republican Origins of French Liberalism,* Ithaca and London (Cornell: Cornell U.P.), 2008.

[48] Ibid. p.108-140.

[49] Jainchill, *Reimagining,* p.292-308.

[50] *Reimagining* の出版後ジャンチルは以下の論文において自身の議論に対する批判に返答しており彼の研究が既存のイデオロギーを重視するあまり史実と矛盾してしまったことを露呈させている. Jainchill, "Liberal Republicanism after the Terror: Charles-Guillaume Théremin and Germaine de Staël," *Pluralism and the Idea of the Republic in France,* ed. H. Jones (Palgrave and Macmillan, London), 2012, p.25-40.

[51] この点について武田は，イデオローグが政治的人文主義に由来する「徳」の概念自体を拒絶するのではなく，それを政治分野ではなく経済分野に落とし込もうとした事を指摘した. Takeda, *Mme de Staël and Political Liberalism,* p.61.

[52] 古代人の徳の概念とスタールの自由主義を関連づけるジャンチルとは異なるスタールの自由主義政治思想についての解釈については，以下を参照. Ibid. P.81-102.

[53] Ibid. p.57-80.

[54] Andreas Kalyavas and Iva Katznelson, *Liberal Beginnings: Making a Republic for the Moderns,* (Cambridge: Cambridge U. P.), 2008.

[55] Kalyvas and Katznelson, " Embracing Liberalism: Germaine de Staël's Farewell to Republicanism," *Liberal Beginnings,* p.118-145.

[56] 宇野重規,『デモクラシーを生きる』, p.13-14. ここではジョームの「主体のリベラリズム」を指す.

[57] Rosenblatt, *The lost history,* 265-266.

3. Takeda , "The Second Part: Influence on Nineteenth-Century French Politics," *Mme de Staël*

and Political Liberalism, p.125-239.
[58] Isaiah Berlin, "Two concepts of liberty ," *Four Essays on Liberty*, (Oxford: Oxford U. P.), 1969, p. 118-172.
[59] "liberty from; absence of interference beyond the shifting, but always recognizable, frontier. 'The only freedom which deserves the name is that of pursuing our own good in our own way. '" Ibid. , p. 127.
[60] Ibid. , p. 131-134.
[61] 川出良枝,『自由とは何であって何でないのか:17-18 世紀の論争空間』, *自由論の討議空間*, p. 32-35.
[62] Berlin, *Four Essays*, p. 124.
[63] Alfred Cobban, *The Social Interpretation of the French Revolution*, (Cambridge: Cambridge U. P.),1999.
[64] コバンは 1957-65 年の間に修正主義的視点からフランス近代史を書き変えた. Alfred Cobban, *A History of Modern France*, vol.1-3, (London:Jonathan Cape), 1957-1965.
[65] Larry Siedentop, "Two liberal Traditions", *French Liberalism from Montesquieu*, p. 15-35; "Two liberal Traditions", in *The Idea of Freedom: Essays in Honour of Isaiah Berlin*, ed. by Ryan, A. , (Oxford:Oxford U.P.), p. 153-174.
[66] Siedentop, "Two Liberal Traditions", p. 18-19.
[67] Ibid. p. 15.
[68] Ibid. p. 16.
[69] Ibid. p. 31.
[70] Ibid. p. 31.
[71] Larry Siedentop, *Tocqueville*, (Oxford: Oxford U. P.), 1994; "Introduction" to *The History of Civilization in Europe*, (Indianapolis:Liberty Fund), 2013, p. vii-xL.
[72] Aurelian Craiutu, *A Virtue for Courageous Minds: Moderation in French Politial Thought, 1748-1830*, (Princeton: Princeton U. P.), 2016. Takeda, *Mme de Staël and Political Liberalism*.
[73] Douglas Johnson, *Guizot: Aspects of French History, 1787-1874*, (London:Routledge and K Paul), 1963.
[74] Johnson, *Guizot*, p. 335. Aurelian Craiutu, "Tocqueville and the Political Thought of the French Doctrinaires (Guizot, Royer-Collard, Rémusat), *History of Political Thought*, vol. 20, no. 3 (Autumn 1999), p. 456-493; *Liberalism under Siege: The Political Thought of the French Doctrinaires* , (Lanham:Lexington Books), 2003. Takeda, "The Second Part: Influence on Nineteenth-Century French Politics, " *Mme de Staël and Political Liberalism*, p. 125-239.
[75] Edouard Scherer, *Etudes critiques sur la littérature contemporaine.* vol.4 (Paris : Michel-Lévy frères), p.85-106. Scherer についてのメロニオの解説として Mélonio, *Tocqueville and the French*, p.120.
[76] Sudhir Hazareesingh, *From Subject to Citizen: The Second Empire and the Emergence of Modern French Democracy* (Princeton , Princeton Legacy Library), 1998, p.3-28.
[77] Eric Anceau, *Napoléon III ;*"Introduction au XIX siècle: vol.1, 1815-1870" ; *Les entrepreneurs du Second Empire* avec Dominique Bargot, Isabelle Lescent-Giles, Bruno Marunot （ Paris, PU Paris-Sorbonne）, 2003.
[78] Theodore Zeldin, *Political System of Napoleon III* (Oxford:Oxford U.P.), 1971.
[79] 以下が近年イギリスにおけるフランス自由主義研究だが知的評伝としての要素が強い. Richard Whatmore, *Republicanism and the French Revolution: An Intellectual History of Jean-Baptist Say's Political Economy* (Oxford, Oxford U.P.), 2004. Biancamaria Fontana, *Benjamin Constant and the Post-Revolutionary Mind* (Cambridge, Cambridge University Press), 1991; *Germaine de Staël: A Political Portrait* (Princeton , Princeton University Press), 2016.
[80]『フランス革命と公共性』, 安藤隆穂（編）名古屋大学出版会, 2003 ; 安藤,『フランス自由主義の成立-公共圏の思想史』.
[81] Pascal Perrineau, *La droite en France de 1815 à nos jours, histoire des droites en France* vol.1, ed. Jean-François Sirinelli (Paris, Gallimard), 2006. François Furet, Jacques Julliard, Pierre Rosanvallon, *La république du centre. La fin de l'exception française* (Paris, Calmann-Lévy), 1988. 英語によるフランス右派, 保守派についての研究の一例としては Amir Bar-On, *Rethinking the French New Right : Alternatives to Modernity,* (London,Routledge), 2013.
[82] Aurélien Ligneureux , *Histoire de la France*

contemporaine.1799-1815. vol.1 : L'empire des français, (Paris , Seuil), 2012. Bertrand Goujon, *Histoire de la France contemporaine vol.2 : Monarchies postrévolutionnaires : 1814-1848* (Paris, Seuil), 2012.

[83] 現代フランスの保守的政治傾向に対抗する形で，フランス革命に根ざした左翼的視点からフランス史を見立てた『フランスの世界史』（*Histoire mondiale de la France*）も出版された．*Histoire mondiale de la France,* ed. Patrick Bouceron (Paris, le Seuil), 2017.

[84] Annelien de Dijn, *French Political Thought from Montesquieu to Tocqueville: Liberty in a Levelled Society?* (Cambridge: Cambridge U.P.), 2008. Thomas Pangle, *Montesquieu's Philosophy of Liberalism: A Commentary on "The Spirit of the Laws"* (Chicago: University of Chicago Press, 1973). Paul Rahe, *Montesquieu and the Logic of Liberty: War, Religion, Climate, Terrain, Technology, Uneasiness of Mind, the Spirit of Political Vigilance, and the Foundations of the Modern Republic* (New Haven: Yale University Press, 2009); Rahe, *Soft Despotism, Democracy's Drift: Montesquieu, Rousseau, Tocqueville, and the Modern Prospect* (New Haven: Yale University Press, 2009). 5.

[85] ウイリアム・ローグ,『フランス自由主義の展開：1870-1914-哲学から社会学へ』ミネルヴァ書房, 1998, p.1.

[86] Takeda, *Mme de Staël and Political Liberalism,* p.179-198, 219-240, 243-260, 281-322.

[87] 武田はこの政治潮流を保守的リベラリズム（conservative liberalism）と呼んだ．Ibid. p.6.

[88] この定義はジョームのそれに近い：フランスのリベラリズムとは,「ドクトリンや哲学ではなく，複数の原則をまとめたもの」である．Jaume, *L'individu effacé,* p.18.

[89] William Selinger and Gregory Conti, "Book Review: *The lost history of political liberalism,*" *History of European Ideas,* vol.46, 2020-Issue3. p.341-354.

Abstract

This article goes over the historiography of nineteenth-century French liberalism over the last 30 years. This period, dominated by post-Cold War logic, was spent on seeking liberalism for the era of liberalism, commensurate with the age after Communism. Consequently, politicized research that reflected well the political culture of individual countries emerged and I demonstrate that this was particularly the case with America and France. The summary of previous research therefore reveals that French liberalism is not restricted to nineteenth-century France. It simultaneously results from a constant dialogue between the past and a quest for liberty at the present time. For this reason, it carries with it the long-lasting tradition of 'philosophical history' that had started with the French Revolution.

（受付日：2021 年 10 月 1 日，受理日：2022 年 3 月 7 日）

武田　千夏（たけだ　ちなつ）
現職：大妻女子大学比較文化学部教授

ロンドン大学博士後期課程終了．　PhD.　大妻女子大学比較文化学部教授.

著者はフランス近代史における政治，文化，思想の接点について 1)スタール夫人，2)フランス自由主義思想，3)ロマン主義的旅行のあり方の３つの視点から研究している．研究の詳細は

https://chinatsutakeda．com/
Main Publications/主な著書:
『「教条主義の母，フランス自由主義の母」―第三共和政期のジェルメン・ド・スタールとオルレアニズムの再生』（原著論文），人間生活文化研究，No．30，　2020，　p．245-267.
Mme de Staël and Political Liberalism in France，Palgrave，2018

“On a Liberal Interpretation of the French Revolution : Mme de Staël’s Considérations sur la Révolution française” Karyna Szmurlo ed.，Germaine de Staël : forging a politics of mediation，　Voltaire Foundation University of Oxford，　2011，　91-108.

“Deux origines du courant libéral en France” Revue française d’histoire des idées politiques，no．18，2003，　p．233-258.